

琉球大学学術リポジトリ

[報告書]生活習慣病に関するサテライトシンポジウム に参加して

メタデータ	言語: 出版者: 南方資源利用技術研究会 公開日: 2014-10-26 キーワード (Ja): 動脈硬化, 血圧, 生活習慣病 キーワード (En): SHR 作成者: 屋, 宏典, OKU, Hirosuke メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002016617

生活習慣病に関するサテライトシンポジウムに参加して

屋 宏 典

*琉球大学遺伝子実験センター

Postscript after satellite symposium to the 11th international symposium on the SHR and cardiovascular risk

Hirosuke OKU

Center of Molecular Bioscience, University of the Ryukyus

Keywords : SHR, 動脈硬化、血圧、生活習慣病

本サテライトシンポジウムは第11回 SHR と心疾患に関する国際シンポジウムのサテライトシンポジウムとしてアメリカワシントン州スポケン (Spokane) にある武庫川女子大学の Fort Wright 分校において開催された。

私が所属する琉球大学遺伝子実験センター遺伝資源応用分野では健康食品開発を視野にいれた機能性物質の検索に関する研究が行われている。近年、食品機能については試験管レベルのみならず、人での評価が問われる傾向が明確になりつつある。本シンポジウムは人における疫学調査を主体としたシンポジウムであることから、沖縄県産資源の応用を考える際の重要な指針が得られることを期待して参加した。

沖縄を5月12日に出発してソウルーシアトル経由でスポケンに到着したのは現地時間の5月12日の午後5時であった。シアトル空港ではマリナーズのイチロー選手の活躍で、日本人観光客が大勢訪れているせいか、空港内の循環電車内のアナウンスは日本

語が流れるし、日本語の案内板があったことが印象的であった。

スポケンには農産物の集積地として発展してきたワシントン州東部中央に位置する農業都市であり、シアトルからスポケンまでの飛行機の眼下には広がる広大な農場がまさにアメリカにきていることを告げているかのようであった。またスポケン空港からホテルまでのバスではカリフォルニア大学の Vogel 博士と同行する機会を得た。氏は以前に沖縄県を研究対象とした疫学調査を琉球大学名誉教授の鈴木博士と共同で行ったことがあるとの話を伺い、偶然とはいえ沖縄県の長寿が世界的に知られていることを改めて認識させられた。また今回のシンポジウムに参加することの浅からぬ因縁を感じた。

翌5月13日午前中はアメリカ、日本を中心とする疫学研究に関する口頭発表があった。血圧、動脈硬化に関する疫学的研究についての発表の中でも、アメリカでの研究は対象人数が数千人から数万人に上り、期間も10年のスパンでの研究があり、スケールの大きさに圧倒される。生理機能に関する我々の農芸化学的なアプローチの仕方は、まず試験管レベル

*沖縄県西原町千原1番地

で評価を行い、次いで動物実験及び人への適用となるが、疫学的研究においては全く逆の手順になる。すなわち、まず人での現象が見いだされ、原因追及の結果として、ある特定の物質なりの生理機能が明らかにされる。疫学的研究を行っている研究者と議論をするときに感じるギャップはおそらく根幹的な研究展開手法の違いによるものかもしれない。疫学研究者曰く、「実験科学者は我々が人で見いだしたことを試験管レベルなり、動物実験なりで追試してもらえればいい、それ以外のことは期待しない」である。ともあれ、今回の学会では疫学的研究を分子レベルまで掘り下げて追試している非常に優れた研究もいくつかあり、先に述べた二つの研究手法は車輪の両輪のようなもので、両方そろったときに相乗的に研究を進展させることになるのであろう。

5月13日の午後は口頭発表に加えて、ポスター発表があった。我々も「動脈硬化易発ウズラにおけるコレステロール吸収の増加」の演題で参加した。動脈硬化易発ウズラは大塚製薬が開発したウズラで、コレステロール投与に対する感受性が高く、普通のウズラに比べて容易に動脈硬化を発症する。我々は動脈硬化易発ウズラがなぜコレステロールに対して

応答性が高いのかを明らかにする目的で脂質代謝系の酵素を中心に解析をおこなってきたが、今回初めてコレステロール吸収能が普通ウズラに比べて高いことを見いだした。種々の実験動物モデルがコレステロール代謝研究のために開発されてきているが、コレステロール吸収機能の異常により、容易に高コレステロール血症を起こすモデルはこのモデルが最初と考えている。コレステロール吸収に関しては古くて尚新しい課題である。吸収担体本体についても未だ明らかではない。今後このようなモデルを利用することによりコレステロール吸収機構の異常が明らかにされ、次いで人に適用されることになれば疫学調査と相俟って健康増進に貢献できるものと考えている。

今回の学会は改めて我々実験科学者にとって常に「人」を念頭に置いて研究課題を選定し、研究を進めるかが如何に重要であるかを再認識するよい機会となった。未筆ながら、このような学会に参加するためにご援助いただいた南方資源利用技術研究会に紙面をかりてお礼申し上げます。尚、今後もこのような支援をできるだけ継続し、研究者の啓蒙に貢献されることを期待したいと思います。



写真1. 学会が開催された武庫川女子大学のFort Wright分校のキャンパス風景

アメリカ的といえいいのであろうか、芝生と煉瓦作りの建物が織りなすゆったりとした余裕のある緑多いキャンパス。

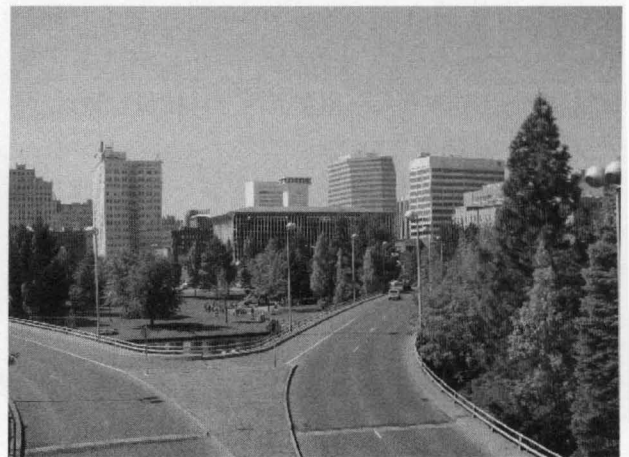


写真2. スポケンの都市風景

シアトルに次ぐワシントン州第2の都市町の中心をスポケン川が貫き、緑豊かな田園都市。